

淡路へきた虫(1)……アルファルファタコゾウムシ

藤 富 正 昭

梅雨期になると毎年日本へ飛来するトビイロウンカは、遠く中国大陸から気流によって運ばれてくる。稲づくりにとって最も恐い害虫である。

今日、世界貿易の拡大により、オランダ市場で日本商社が購入した生花が、航空便で運ばれ、翌日には、東京で販売される時代となった。

船の輸送も、コンテナ化が進み、食品輸送には、空調設備のあるコンテナが利用されている。

今日、昆虫の多くは、人類が開発したこうした輸送方法の中で、世界中に分散移住を行っている。「招かざる客＝農作物害虫」も、こうした人間の営みの中で、世界から日本へと分布を拡大し、その種類も年毎に増加してきている。

アルファルファタコゾウムシは、名の示す通り、牧草アルファルファの大害虫であり、ヨーロッパからアメリカへ、そして日本へと分布を拡大してきた害虫である。

日本では、1982年に福岡市と沖縄県で初めて見つけられた。主にマメ科植物を食害し、ウマゴヤシ、ゲンゲ、などの雑草を加害する。

淡路島では、1988年に筆者が初めて幼虫を採集した。中国・四国地方で確認されておらず、近畿で最初の発生地が淡路という、ありがたくない記録が残った。

成虫は、さまざまなすき間にもぐり込み夏眠する習性があり、梱包用のダンボール紙の間にも好んで入り込むことが知られている。夏眠中は絶食でも2ヶ月以上生存することができ、ダンボールにもぐり込めば、世界中どこへでも人間が運んでくれる訳である。

日本へ入ってきたこの虫は、年1回の発生といわれ、冬～春に産卵し、幼虫は4月～5月に発生し、5月～6月に蛹となり、6月に新成虫が出現する。しかしながら秋にも、もう1世代あるのではないかと考えられる事実が、いくつか見つかってきている。

アメリカにおいては、3つの生態型があり、休眠の仕方も異なっている。淡路へ入ってきた虫は、九州のものとは、出身地が異なるのか、また、九州から来たものか、これから解明されるだろう。

淡路島における分布と幼虫の食草について以下に記録をとどめておきたい。

(分布) 1988年 洲本市・緑町・津名町

1989年 三原町・西淡町・南淡町・五色町・一宮町、および既発生地

(食草) アルファルファ、ウマゴヤシ、カラスノエンドウ、シロツメグサ、ゲンゲ(レンゲ)

* コメツブウマゴヤシ、スズメノエンドウにおける寄生は認めていない。